＜資料＞

学生の肯定的な精神障害者観育成のための教育プログラム

佐　藤　園　美

抄　録：本研究の目的は、ボランティア活動を課題とした授業の前後で、学生の精神障害者観に関する調査を行い、その結果を比較検討し教育効果について検証することで、今後の教育プログラムの示唆を得ることである。

対象の授業を受講した学生56名に対して精神障害者観に関する無記名自己式による調査を実施し、授業前56名、授業後43名から回答を得てこれを分析対象とした。質問項目は精神障害者社会復帰促進センター（1998）が一般国民に対して行った精神障害者観に関する11の質問項目を元に作成し、それぞれ「そう思う、どちらともいえない、そう思わない」の３件法で回答を求めた。さらに授業後の調査では「精神障害者に対する見方・考え方に影響を与えた事柄」についての自由記述欄を設け、その内容についても検討した。

結果、授業後には「精神障害者の行動はまったく理解できない」の１項目を除き、他の全ての項目において、おおむね学生の精神障害者観は肯定的となった。また、精神障害者に対する見方・考え方に影響を与えた事柄についての自由記述では、38.6％の学生が「ボランティア」をあげた。このことから、授業の一環として行ったボランティア活動は、学生の肯定的な精神障害者観の育成に一定の効果があったと考えられる。今後はボランティア活動の内容やその継続に関してさらなる検討が必要である。

キーワード：精神障害者観、ボランティア

はじめに

精神保健福祉の対象である精神障害については、他障害と比較して一般住民の認識度は低く（吉本 1984）、精神障害者に対する偏見や否定的なイメージを持つ人が多いと考えられる。これは一般住民にだけいけることではなく、看護学生の障害者観を比較検討した調査でも、身体障害者は「やさしく、あたたかい」などポジティブなイメージだったのに対して、精神障害者は「不安定で、近寄りがたい」などネガティブなイメージだったとの報告がある（松岡 2002）。精神保健福祉の専門家として、精神障害者のストレングス（能力、才能、可能性等）に着目した支援を行うためには、肯定的な精神障害者観をもつことが必要となる。つまり精神保健福祉士の養成教育では、学生の肯定的な精神障害者観を育成することが重要だと考える。

筆者は以前学生の精神障害者観を明らかにした上で、対人援助職として求められる精神障害者観形成のための教育プログラムについて検討し、授業に精神障害者との接触体験を取り入れることを提案した（佐藤 2007）。その内容を踏まえ、今回「精神保健福祉ソーシャルワーク論」の課題の１つとして、精神障害者に対するボランティア活動の導入を試みた。そこで本研究は、ボランティア活動を課題とした授業前後の学生の精神障害者観を比較検討し、その教育効果について検証することで、今後の教育プログラムの示唆を得ることを目的とした。

Ⅰ　授業概要

今回対象とした授業科目「精神保健福祉ソーシャルワーク論」は、精神保健福祉士養成課程の指定科目である「精神保健福祉相談援助の基盤Ⅱ」に相当し、教育内容は厚生労働省より示されているシラバスを踏まえたものとなっている。授業の学習目標は「相談援助活動の対象と活動の目的について理解する」「精神保健福祉分野における専門職、特に精神保健福祉士の専門性とその役

割を理解する」「精神障害者の相談援助における権利擁護の意義を理解する」「精神保健福祉活動における総合的・包括的な援助とチームアプローチについて理解する」の４つである。

この科目の配当年次は２学年前期で、学生にとって精神保健福祉に関する初めての専門科目となるため、特に精神保健福祉士が行う相談援助の対象者理解に力を入れている。授業では特別講師として精神障害の当事者から直接話を聞く機会を設け、学生の対象者理解の育成を図っている。これに加え、昨年度より学生が精神障害者と直接かかわる機会を意図的に作ることを目的として、精神障害者対象の福祉施設でボランティア活動を行い、その内容を授業で発表することを課題としている。

Ⅱ　研究方法

１．調査対象

Ａ大学看護福祉学部臨床福祉学科２年で、精神保健福祉ソーシャルワーク論を選択した学生56名

２．調査時期

１回目：授業前2014年４月８日

２回目：授業後2014年９月17日

３．調査方法

対象学生に対して無記名自己式による調査を実施した。その結果、１回目56名、２回目43名より回答を得た。

４．質問内容

１）精神障害者社会復帰促進センター（1998）が一般国民に対して行った精神障害者観に関する11の質問項目を元に作成し、それぞれ「そう思う、どちらともいえない、そう思わない」の３件法で回答

２）精神障害者対する見方・考え方に影響を与えた事柄についての自由記述（２回目のみ）

５．分析方法

１）１回目調査では精神障害者との接触体験の有無・性別と各質問項目にたいしてχ^2検定を行った。また、１回目と２回目の調査結果から全体の傾向について分析した。さらに肯定的態度を点数化するため、肯定的態度を捉える項目①④⑥⑦は「そう思う２点、どちらともいえない１点、そう思わない０点」、否定的態度を捉える項目②③⑤⑧⑨⑩⑪は「そう思う０点、どちらともいえない１点、そう思わない２点」で各学生の合計点の平均値と標準偏差を算出し、１回目と２回目のｔ検定を行った。統計処理はSPSS 22 for Windows 版を使用した。

２）自由記述については、その内容を整理し、文章で記載されたものは１文脈を１記録単位、単語で記載されたものは１単語１記録単位とした。意味内容の類似性によって分類し、サブカテゴリー、カテゴリーを抽出し、その体験によって肯定的、否定的どちらの見方・考え方に至ったのかについてまとめた。

Ⅳ　結果

１．対象学生の特性

受講者の属性を見ると56名中男性18名（32％）、女性38名（68％）と女性が多い。また精神障害者との接触体験（**表１**）を見ると女性の81.1％約８割が何らかの形で精神障害者と出会った経験があるのに対して、男性は55.6％に留まっている。性別と接触体験の有無のχ^2検定を行ったところ有意な結果（$p<0.05$）となり、受講する女子学生の方が男子学生より何らかの形で精神障害者と出会った経験がある者が多い事が分かった。

表１　接触体験の有無と性別　n=56

接触体験	男性	女性	合計	検定
ある	10(55.6%)	31(81.1%)	41(72.7%)	*
ない	8(44.4%)	7(18.9%)	15(27.3%)	

χ^2検定　$p<0.05$

また、同じく性別と精神障害者観についてχ^2検定を行ったところ７つの項目で有意（$p<0.05$）な結果がでた（**表２**）。つまり女子学生は男子学生と比較して、精神障害者は「病院より地域での生活を送る方が良い」「その行動は理解できる」「家族に精神障害者がいることを知られることに対して抵抗感が薄く」「精神障害者でも信頼できる友人になる」「精神科病院が必要なのは精神障害者の多くが傷害事件を起こすためではない」「精神障害者は再発を防ぐために自分で健康管理をすることができる」「精神障害者が事件を起こした場合、罪に問われることもある」と精神障害者に対して肯定的な精神障害者観をもっていることが分かった。

２．接触体験と精神障害者観

全体で精神障害者との接触体験の有無によるχ^2検定の結果、有意な結果（$p<0.05$）となった項目は⑨「精神障害者は、病気の再発を防ぐために自分で健康管理をすることは期待できない」のみであった。精神障害者と何らかたちで接触体験がある学生の方が、精神障害者は病気の再発を防ぐために自分の健康管理ができると考えていることが分かった。

表２　性別と精神障害者観

n=56

		性別	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	検定
②	精神科病院の入院患者は、厳しい実生活にさらされるより病院内で苦労なく過ごす方がよい	女	7.9%	52.6%	39.5%	＊
		男	29.4%	58.8%	11.8%	
③	精神障害者の行動はまったく理解できない	女	0.0%	42.1%	57.9%	＊＊
		男	22.2%	66.7%	11.1%	
⑤	家族に精神障害者がいるとしたら、それを人に知られるのは抵抗がある	女	13.2%	47.4%	39.5%	＊
		男	50.0%	33.3%	16.7%	
⑦	精神科病院に入院した人でも、信頼できる友人になれる	女	73.7%	26.3%	0.0%	＊
		男	44.4%	44.4%	11.1%	
⑧	精神科病院が必要なのは、精神障害者の多くが乱暴したり、興奮して傷害事件を起こすからである	女	13.2%	44.7%	42.1%	＊
		男	44.4%	44.4%	11.1%	
⑨	精神障害者は、病気の再発を防ぐために自分で健康管理をすることは期待できない	女	2.6%	36.8%	60.5%	＊
		男	16.7%	72.2%	11.1%	
⑪	精神障害者は、事件を起こしても、決して罪に問われることはない	女	0.0%	55.3%	44.7%	＊
		男	16.7%	33.3%	50.0%	

χ^2検定　＊ p ＜0.05、　＊＊ p ＜0.01

表３　接触体験の有無と健康管理の可否

接触体験	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	検定
ある	20.0%	47.5%	32.5%	＊
なし	33.3%	53.3%	13.3%	

χ^2検定　＊p＜0.05

３．授業前後の精神障害者観の変化（表４）

１）精神障害者観に関するアンケート調査集計表

①「激しく変化する現代社会では誰でも精神障害者になる可能性がある」の質問では、「そう思う」の回答が授業前後で71.8％から83.7％に上昇し、「そう思わない」が授業後０％になったことは授業により正しい知識を得たためと思われる。しかしまだ16.3％「どちらともいえない」と回答している。

②「精神科病院の入院患者は病院患者は、厳しい実生活にさらされるより病院内で過ごす方がよい」の質問では、「そう思わない」の回答が授業の前後で30.4％から34.9％とほぼ変化がなかったが、「そう思う」が14.3％から2.3％に下がった。

③「精神障害者の行動はまったく理解できない」質問に対して「そう思う」が授業前後で7.1％から7.0％にほとんど変化せず、「そう思わない」の回答が授業前後で42.9％から34.9％に減っている。一方「どちらともいえない」が50.0％から58.1％に増加している。

④「妄想、幻聴のある人でも、病院に入院しないで社会生活のできる人が多い」の質問では、「そう思う」の回答が授業前後で50.0％から58.1%に増加した。一方で「そう思わない」も1.8%から4.7%に増加している。

⑤「家族に精神障害者がいるとしたら、それを人に知られるのは抵抗がある」の質問では「そう思う」の回答が授業の前後で25.0%から14.0%に低下し、「そう思わない」の回答も32.1%から23.3%に下がっている。その一方「どちらともいえない」が42.9%から62.8%にかなり上昇した。

⑥「精神障害者が、普通でない行動をとるのは病状の悪いときだけで、ふだんは社会人としての行動がとれる」の質問では、「そう思う」の回答が授業の前後で44.6%から44.2%とほぼ変化がないのに対して、「そう思わない」が7.1%から4.7%に下がっている。

⑦「精神科病院に入院した人でも、信頼できる友人になれる」の質問では、「そう思うが64.3%から74.4%に上昇し、「そう思わない」は3.6%から０％になった。

⑧「精神科病院が必要なのは、精神障害者の多くが乱暴したり、興奮して傷害事件を起こすからである」の質問では「そう思う」の回答が授業前後で23.2%から4.7%に低下し、「そう思わない」は32.1%から37.2%に増加した。

⑨「精神障害者は、病気の再発を防ぐために自分で健康管理することは期待できない」質問では、「そう思う」の回答が授業の前後で7.1%から０％に低下し、「そう思わない」は44.6%から51.2%に増加した。この項目はχ^2検定で有意な結果（$p<0.05$）となり、学生は授業を通して、精神障害者は自ら病気の再発防止のための健康管理ができると考えるようになったと推測できる。

⑩「精神障害者が、１人あるいは仲間どうしでアパートを借りて生活するのは心配だ」の質問では、「そう思う」が23.2%から14.0%に低下しているが、そ

表４　精神障害者観に関するアンケート調査集計表　　上段：受講者数（授業前n=56、授業後n=43）　下段：％

No.	質問項目	そう思う		どちらともいえない		そう思わない		無回答		χ^2検定有意確率
		授業前	授業後	授業前	授業後	授業前	授業後	授業前	授業後	
①	激しく変化する現代社会では誰でも精神障害者になる可能性がある	40	36	15	7	1	0	0	0	0.293
		71.4%	83.7%	26.8%	16.3%	1.8%	0.0%	0.0%	0.0%	
②	精神科病院の入院患者は、厳しい実生活にさらされるより病院内で苦労なく過ごす方がよい	8	1	30	27	17	15	1	0	0.115
		14.3%	2.3%	53.6%	62.8%	30.4%	34.9%	1.8%	0.0%	
③	精神障害者の行動はまったく理解できない	4	3	28	25	24	15	0	0	0.707
		7.1%	7.0%	50.0%	58.1%	42.9%	34.9%	0.0%	0.0%	
④	妄想、幻聴のある人でも、病院に入院しないで社会生活のできる人が多い	28	25	27	16	1	2	0	0	0.441
		50.0%	58.1%	48.2%	37.2%	1.8%	4.7%	0.0%	0.0%	
⑤	家族に精神障害者がいるとしたら、それを人に知られるのは抵抗がある	14	6	24	27	18	10	0	0	0.134
		25.0%	14.0%	42.9%	62.8%	32.1%	23.3%	0.0%	0.0%	
⑥	精神障害者が、普通でない行動をとるのは病状の悪いときだけで、ふだんは社会人としての行動がとれる	25	19	27	22	4	2	0	0	0.864
		44.6%	44.2%	48.2%	51.2%	7.1%	4.7%	0.0%	0.0%	
⑦	精神科病院に入院した人でも、信頼できる友人になれる	36	32	18	11	2	0	0	0	0.324
		64.3%	74.4%	32.1%	25.6%	3.6%	0.0%	0.0%	0.0%	
⑧	精神科病院が必要なのは、精神障害者の多くが乱暴したり、興奮して傷害事件を起こすからである	13	2	25	25	18	16	0	0	0.037
		23.2%	4.7%	44.6%	58.1%	32.1%	37.2%	0.0%	0.0%	
⑨	精神障害者は病気の再発を防ぐために自分で健康管理をすることは期待できない	4	0	27	21	25	22	0	0	0.193
		7.1%	0.0%	48.2%	48.8%	44.6%	51.2%	0.0%	0.0%	
⑩	精神障害者が、一人あるいは仲間どうしでアパートをかりて生活するのは心配だ	13	6	28	26	15	11	0	0	0.452
		23.2%	14.0%	50.0%	60.5%	26.8%	25.6%	0.0%	0.0%	
⑪	精神障害者は、事件を起こしても、決して罪に問われることはない	3	0	27	14	26	29	0	0	0.059
		5.4%	0.0%	48.2%	32.6%	46.4%	67.4%	0.0%	0.0%	

の一方で「そう思わない」の回答も26.8%から25.6%に下がっている。

⑪「精神障害者は、事件を起こしても、決して罪に問われることはない」の質問では、「そう思う」の回答が授業の前後で5.4%から０％になり、「そう思わない」は46.4%から67.4%に増加した。

２）授業前後における肯定的評価の変化（**表５**）

授業の前後で調査した結果では、肯定的評価合計点の平均値は数学的に見て有意に高くなったとは言えないが、平均値が１ポイント以上上昇したことを考えると、全体的な精神障害者に対する学生の見方・考え方は授業の前後で肯定的に変化したといえる。

表５　授業前後における精神障害者観の肯定的評価平均値の比較

	調査時期	度　数	平均値	標準偏差	優位確率(t検定)
合計点	開始時	56	14.68	3.45	0.064
	終了後	43	15.84	2.59	

４．精神障害者に対する見方・考え方に影響を与えた事柄

１）分析対象とした記録単位数

授業後の調査の際、精神障害者観に関する調査と同時に、学生の精神障害者に対する見方や考え方に影響を与えた事柄について自由記述を求め、35名より回答を得た（回答率81.4％）。ここから影響を与えた40文脈44記録単位を抽出し、これらを分析の対象とした。その結果表６に示すように16のサブカテゴリーから８つのカテゴリー「ボランティア」「実習」「授業」「親しい人間関係」「公共の場」「報道」「働く場」「芸術作品を見て」が抽出された。

その記録単位が最も多かったのは「ボランティア」で全体の38.6％を占めた。また、「ボランティア」をすることにより殆どが精神障害者に対して肯定的な見方をするようになったと回答している。

それに対して、否定的な精神障害者観は「公共の場」で目撃した障害者のふるまいや「報道」を通してもったという回答があった。

Ⅳ　考察

１．精神障害者との接触体験と精神障害者観

ここ数年Ａ大学臨床福祉学科の精神保健福祉コースは男子学生に比べて女子学生が多い。その比率は、４年生で１：３、３年生は１：４の割合である。コースの定員は25名となっており、最終的には３年の前期末に決定することになる。精神保健福祉ソーシャルワーク論は精神保健福祉士受験資格取得の指定科目なため、将来精神保健福祉コースを希望する学生は必ず受講しなければならない。臨床福祉学科２年生は全体で108名（男子学生41名、女子学生67名）、このうち将来コースを選択しようと考えている学生は男子学生18名、女子学生38名となっており、この学年でも女子学生の方が精神保健福祉に関心が高いことが分かる。

また、今回の調査で、女子学生の方が男子学生に比べて精神障害者に対して肯定的な見方をしていることが明らかになった。一方、一般住民に対する調査で、精神障害者と接触体験がある人は無い人に比べて精神障害者に対して肯定的な態度を示すことが報告されている（精神障害者社会復帰促進センター 1998）。このことを考え合わせると、女子学生の方が男子学生に比べて精神障害者との接触体験が有意に高いことから、接触体験の有無が女子学生の精神障害者に対する肯定的な見方に影響しているのではないかと推測される。

２．授業後の精神障害者観

授業後の精神障害者観の質問項目で有意な結果（χ^2検定、$p<0.05$）となったのは、⑨「精神障害者は、病気の再発を防ぐために自分で健康管理することは期待できない」の１項目のみであった。しかし単純集計の％を比較すると、③「精神障害者の行動はまったく理解できない」の１項目を除き、他の全ての項目では、おおむね学生の精神障害者観は肯定的となったといえる。これに加え、肯定的評価合計点の平均値が１ポイント以上上昇したことを見ると、全体的な精神障害者に対する学生の見方・考え方は授業の前後で肯定的に変化したと考えられる。

それではなぜ③の質問のみ、肯定的な変化が見られなかったのだろうか。③の質問に対する回答内容を詳しくみると、「そう思う」の％はほとんど変化がなく、「そう思わない」の回答が、授業後42.9％から34.9％に減っている。これは、精神障害者と関わりはしたが、精神障害者の思いや考えに触れることが少なく、その接触体験が深い対象者理解に結びついていないことが推測される。深谷（2004）は精神障害者に対する偏見除去に有効なア

表６　精神障害者に対する見方・考え方に影響を与えた事柄　　記録単位数n=44（％）

影響を与えた事柄		肯定的	否定的	不明	合計
カテゴリー	サブカテゴリー				
ボランティア	ボランティア	15	0	2	17(38.6)
実習	実習	5	0	0	5(11.4)
授業（講義）	授業（講義）	4	0	0	4
	特別講師（当事者）	2	0	1	3
	精神障害者に関するビデオ等	0	0	2	2
	計	6	0	3	9(20.5)
親しい人間関係	家族	0	0	2	2
	友人	2	0	0	2
	恋人	0	1	0	1
	計	2	1	2	5(11.4)
公共の場	JR	0	1	0	1
	公共の場での態度	0	1	0	1
	お店	0	1	0	1
	計	0	3	0	3(7.0)
マスコミの報道	ニュース	0	1	0	1
	ドキュメンタリー	0	0	1	1
	計	0	1	1	2(4.5)
働く場	バイト	1	0	0	1
	インターンシップ	0	0	1	1
	計	1	0	1	2(4.5)
芸術作品を見て	芸術作品を見て	1	0	1	1(2.3)

プローチの１つとして「障害者との接触」をあげているが、一方で否定的なイメージを強化する危険性も指摘している。精神障害の場合、表面的な接触は、かえって精神障害者に対する偏見を助長することも考えられる。

３．精神障害者観に影響を与えた事柄

今回の調査で学生が精神障害者観に影響を与えた事柄として一番多くあげたのは「ボランティア」だった。そのボランティア活動で実際に精神障害者と関わる事を通して、学生は精神障害者に対して肯定的なイメージをもつことになったと考えられる。前述した一般住民への調査で「接触体験によって肯定的な精神障害者観が育成される（精神障害者社会復帰促進センター 1998)」という報告がなされているが、今回の調査対象だった学生についても同様の結果となった。

また、今回の学生の記述の中に、「ボランティア活動を通して精神障害者に対するイメージが少し怖いから何も恐れることはない人たちへと変化した」「ボランティアや実習を行って…精神障害といってもその障害の症状は人によってまたそのときの体調によって変わるであろうと思うし、精神障害者は危ない人という考え方はよくないと思った」「ボランティアに行くまでは、精神障害者は道の領域であるが故に、指示し導かれなければならないという偏見があった…知らないことによる偏見が大きかった気がする」などの意見が多くあった。村井ら（2002）は学生が実習前後に抱く精神障害者のイメージ調査を行い、実習前の精神障害者への「恐さ」や「関わりの困難さ」のイメージは、実際に接した経験がないことによる「未知なるものへの恐さ」があるとしている。つまり「知らない」「分からない」ことは漠然とした恐怖や否定的な感情を産むが、そのようなマイナスのイメージは実際に接することにより多くは払拭できるということである。

立石（2002）はボランティア経験により、行動や意見が変化し、共感的対人関係を形成することが確認できるとし、社会福祉教育現場においてボランティア活動をある程度強制することの必要性について述べている。筆者の中には、ボランティアという自主性を重んじる活動を、授業の一環として強制的に行わせることに対しての迷いがあった。しかし今回の調査結果から、ボランティア活動という、学生が積極的に精神障害者と接する機会を早い時期に設けることの必要性を改めて感じ、授業の課題としてボランティア活動を導入する事は、学生の肯定的な精神障害者観育成に一定の教育効果が認められると考えることができた。

４．今後の授業内容の検討と課題

上記で述べたように、授業の課題としてボランティア活動を導入したことは、学生が精神障害者を理解し、肯定的な視点・考え方をもつ上で一定の効果があったと考えられる。しかし授業の課題として導入したため、学生にとっては必要に迫られてのボランティア活動であったことは否めない。そのため、ボランティア活動が一過性のものとなり、とりあえず参加はしたが、精神障害者に対する見方・考え方の価値観の変化は起こらず、深く対象者を理解することまでは至らなかった学生も見受けられる。また、結果的に精神障害者に対する見方・考え方の一面が、否定的に変化した学生がいたことも推測できる。

精神障害者との接触体験がマイナスの方向に働かないためには、活動の内容やその後スーパービジョン等が重要となってくる。また、ボランティア活動は、受け入れてくださる施設側の状況にもよるが、１回で終わるのではなく、継続的な活動であることが望ましい。授業で強制的に行ったボランティア活動が、学生にとって意味のあるものとなり、その後の継続的な学生の自主的な活動へと結び付けられるような工夫が、求められている。

まとめ

今回の調査を通して、現在精神保健福祉ソーシャルワーク論の授業で課題としているボランティア活動への参加は、学生の肯定的な精神障害者観の育成に効果があったと考えられる。その一方で授業へのボランティア活動の導入の仕方についての課題も明らかとなった。今回はボランティア活動を中心に考察したが、今後も学生の肯定的な精神障害者観育成のため、さらなる授業内容全体の検討が必要である。

文　献

深谷裕（2004)「精神障害者に対する社会的スティグマの除去：三つのアプローチ：教育・接触・制度政策」『精神障害者とリハビリテーション』8(2), 173-179.

松岡治子・福山なおみ・湯沢治雄（2002)「看護学生の精神障害者観の形成に関する一考察」『川崎市立看護短期大学紀要』7（1), 17-23.

村井里依子・松崎緑・岩崎みすず・ほか（2002)「学生が実習前後に抱く精神障害者のイメージ―精神看護実習前後の比較を通して―」『長野県看護大学紀要』4, 41-49.

佐々木敏明・伊藤嘉弘・斉藤健三・ほか（1998)「精神

保健ボランティアの精神障害者観に関する調査研究」『北海道ノーマライゼーション研究』10，35-46.
佐藤園美（2007）「学生の精神障害者観と教育プログラムの検討」『長野大学紀要』28（３・４），31-39.
精神障害者社会復帰促進センター（1998）「精神障害者観の現状’97－全国無作為サンプル2000人の調査から―」『ぜんかれん保健福祉研究所モノグラフ』22，22-40.
立石宏昭（2002）「ボランティア経験における精神障害者観の変容」『ファシリテーズネット』５(２)，33-38
入澤友紀・田村文子（2003）「精神監護学実習における学生の「学び」の内容分析」『群馬県立医療短期大学紀要』10，71-79.
吉本充賜（1984）「一般住民の精神障害者観」『障害者福祉の焦点』ミネルヴァ書房，118-132.

Educational program to encourage students' positive views of people with mental disorders

Sonomi SATO

Abstract : The purpose of this study is to consider educational programs to develop students' positive views of people with mental disorders. The programs would do this by conducting an investigation about students' views of people with mental disorders before and after the Psychiatric Social Work class and then analyzing the results.

A survey was conducted of 56 students taking the class, and got 56 "before" and 43 "after" answers. The questions in the survey were created based on the 11 questions that the National Federation of Families with The Mentally Ill asked the general public in 1997. In addition, the survey after the class had space to write comments about "the matter that affected the way of looking and thinking about people with mental disorders", and those contents were also examined.

In the results, except for an item of "I can't understand the actions of people with mental disorders at all", students' views of people with mental disorders changed positively. In addition, 38.6% of students gave "Volunteer" in the comments section.

Through volunteer activity, students' views of people with mental disorders were positively effected. Further examination of this program is necessary regarding content of volunteer activities and to encourage the continuance of this volunteer work the future.

Key Words : Views of people with mental disorders, Volunteer